

翻訳：アレクサンダー・ハミルトンのカンボジア、 コーチシナ旅行記

坂口 明日香・飯塚 琴美・井野 恵里花・小川 桃唯栞・
小木曾 茉央・清田 真子・清信 巴栞・田神 みらの・
田村 涼華・朝田 華子・長谷川 芽泉・吉澤 夏実・
北川 香子¹

はじめに

本稿は2021年度外国語演習IIPの授業で取り上げた、アレクサンダー・ハミルトン Alexander Hamiltonの旅行記のうち、カンボジア（第48章）とベトナム（第49章）に関する章の全文訳である。アレクサンダー・ハミルトンは、17世紀末から18世紀初にかけて活動した冒険的商人であるが、現時点では生没年は不明で、以下のような活動歴が知られている。

16??年、スコットランドに生まれる
16??年、ヨーロッパ、北アフリカ、ジャマイカの沿岸を旅行
1688年4月にシュルーズベリー Shrewsbury号の定員外船員としてロンドンを発つ
1689年11月にボンベイBombay〔ムンバイ〕到着
1690年、スーラトSuratに向かう
1692?年、中国に向かう
1693年、厦門Amoy滞在
1694年、アチェAcehおよびマラッカMalaccaへ向かう
1695年、ジョホールJohor、その後スーラトへ
1696年、スーラトでの自身の行動を弁護するため、ボンベイにいた
1697年、再度厦門滞在
1699年、シンドSindの港、ラハリバンダールLaharibandarにいた
1700年、タッター Tatta滞在、その後再度中国へ向かい、途中でマラッカを訪問

¹ 許可をくださった方のみ、氏名を記載しています。

- 1702年、アチェおよびスーラト滞在、次にジョホールとマラッカ滞在
スーラトからの交易のためにアルベマールAlbemarle号を雇う
- 1703年、4度目の中国への旅、ジョホール経由
友人であるジョホールのスルタンSultanからシンガポールSingapore島を
提供されたが断る
次にマカオMacaoへ向かう
- 1704年、ヴィンタグリー Vintaghurry号でマカオからジョホール、スーラト、ジャワ
Javaへ
バタヴィアBataviaとスマランSemarang滞在、その後ゴアGoaとスーラト
へ
- 1705年、ベンガルBengalへ
カルカッタCalutta〔コルカタ〕からスーラトへ
- 1706年、さらに交易をするためにカルカッタに戻る。
- 1707年、コーチンCochin〔コーチ〕とマヘMahé〔セーシェル〕、そしてマドラス
Madras〔チェンナイ〕滞在
ボルネオBorneoのバンジャルマシンBenjarmasinのイギリス人居留地の火
災で財産を失う
- 1708年、バラソールBalasore〔バーレーシュワル、オリッサ州〕と再度カルカッタ
へ
資金不足のため、家を抵当に入れ、インダストリー Industry号というボ
ートを売却
- 1709年、米を満載した彼の船が、アンダマンAndamans沖でフランスに拿捕される
が、ハミルトンはフランスからオランダの拿捕船1隻を購入
- 1710年、ヴィシャーカパトナムVizagapatam〔アーンドラ・プラデーシュ州〕とペ
グー Pegu滞在
- 1711年、サティスファクトリー Satisfactory号でペグーからマドラスに来て滞在
- 1712年、紅海沿岸のモカMokha滞在
- 1714年、再度モカ滞在
- 1715年、おそらくペルシャ湾滞在
- 1716年、モーニング・スター Morning Star号で再度モカ滞在、そしてバンドル・アッ
バースBandar Abbas滞在
- 1717年、海賊の攻撃で負傷、しかしボンベイとスーラトに到達
ボンベイの東インド会社海軍を指揮するよう指名される
- 1718年、「カンボジアへの旅に着手するため」公職を辞する
アユタヤAyutthayaに行く

1720年、ボンベイ、カンボジア、マラッカに滞在

1721年、バンダル・アッパース、バスラBasra、そしておそらくマスカットMuscat
に滞在

1722年、ボンベイとスーラト滞在、ここでモーニング・スター号を売却

1723?年、スコットランドに戻る

1724年、商売のためオランダ滞在

1725年、ロンドンでイギリス東インド会社役員会に請願

スコットランドに戻る（おそらくエディンバラあるいはその近隣）、『長い
二冬の夜nights of two long winters』の間の物語を執筆

1732年10月7日、『ジェントルマンズ・マガジンGentleman's Magazine』がアレク
サンダー・ハミルトン船長の死を伝えるが、別人物のようである

1733年6月22日、イギリス東インド会社役員会議事録に、会社の積荷検査官として
「アレクサンダー・ハミルトン船長・・・ザカリー・タヴォイZachary
Tovoy船長の後任となることを嘆願」と記録

17??年、死去 [Smithies 1997:2-4]

18世紀の大陸部東南アジアに関するヨーロッパ人の記録は極めて少ないため
[Smithies 1997:5]、ハミルトンの旅行記は貴重な史料といえる。

1. カンボジア [Hamilton:196-207]

第48章 カンボジアに関する情報：その交易、およびシャム人が彼らの国に仕掛けた先
の戦争と、その失敗について

最初に出会う海港はクパンソアプCupanhsoap²、カンボジア領内の町であり、象の歯、
スティックラック、カンボーヅCambougeあるいはカンボジアCambodiaの樹脂³を産出
する。しかし、カンボジア宮廷から許可を得ていない自由貿易は許されていない。

² コムボン・サオムKompong Som（コンボン・ソム）。スミーズ版の脚注ではシハヌークヴィルSihanoukville
となっているが [Smithies 1997:187]、前保護国期のコムボン・サオム地方の中心地はスラエ・アムベルSré-
Umbell [Pavie 1884:54-56]。スラエ・アムベルはカンボジア語で塩田を意味する。

³ 藤黄。

次の場所はポンテアマスPonteamass⁴である。かなり深いが狭い川を持ち、長年にわたってかなり良い交易地であった。この川は、南西モンスーンの雨季にはバンサックBansackすなわちカンボジアCambodia川⁵と連絡する。この利点が、カンボジア市⁶からこちらへと外国貿易を引き寄せていた。カンボジア市は川の上流100リーグ⁷近くのところに位置し、道程の大部分は常に川下に向かう流れに逆らって進むため、航行が長く困難なものになってしまい、そこまで商品を運びたがる者はほとんどいない。そのために、外国貿易はポンテアマスを選ぶのである。ポンテアマスは1717年までかなり繁栄してい

⁴ バンティエイ・ミエスBanteay Meas (ハーティエンHatien、現ベトナム領)。バンティエイ・ミエスはカンボジア語で黄金の砦を意味する。

18世紀のハーティエン(漢字では河僊、河仙など)は、華人の鄭玖・鄭天賜親子が支配する半独立の港市国家であったことが知られている。鄭玖は1655年に広東省雷州府に生まれ、1671年にカンボジアの南榮府(ブノム・ベン)に渡り、王に気に入られて商業関係の事項を任された。後に商業上の利益を王に説いて許され、1687～95年頃に柴末府に移った。この柴末府という地名も、カンボジア語のバンティエイ・ミエスに由来すると考えられる。当時の柴末府は、漢人・華民(ベトナム人)、唐人(中国人)、真臘・高綿(カンボジア人)、閩婆(マレー人)の商船が集まる地であった。ベトナム側の史料によると、鄭玖は1711年に阮氏に帰附し、河仙鎮総兵に任命された。

鄭玖が1739年に死亡すると、その子鄭天賜が後を継いで、河仙鎮都督に任じられた。『大南寔録前編』によると、鄭天賜は1739年に真臘(カンボジア)の匿盆の攻撃を退け、1756年には真臘王匿原に、尋奔・雷嶺の地を阮氏に割譲させた。当時匿原は、阮氏の討伐を受けて河僊に逃れてきていた。ただし、これらの事件はカンボジアの『王朝年代記』には現れず、匿盆が誰なのかは不明であり、また匿原にあたるアン・スングオンAng Snguon王は、1756年以前に病死してしまっている。

カンボジア語史料では、鄭天賜はブレア・ソトアトPreah Sotoatという名前で記されている。最も年代が早いものは、「カンボジアに住むブレア・ソトアト」が1742年に日本の徳川幕府に宛てたカンボジア語の書簡であり、東京大学史料編纂所蔵の『外国関係書簡』に近藤重蔵による精巧な写しが収められている。カンボジアの『王朝年代記』では、ブレア・ソトアトはウテイリエチエOutey Réachéa=アン・タンAng Tân王(ベトナム側の史料では匿尊)のブレア・トアマ・ベイダーPreah Thamma Beida(義父、後援者)で、同王が王族同士の争いに勝利して即位する際に軍事的な援助を与えている。なお『大南寔録前編』では、このとき匿尊が鄭天賜への謝礼として香澳、芹渤、真森、柴末、靈瓊の5府を与えたことになっているが、これもカンボジアの『王朝年代記』には現れない。また鄭氏は小港口国と称して清に朝貢した。

ハーティエンは1771年にトンブリーThonburi朝シャムのターク・シンTak Sin王の攻撃を受けて陥落した。その後ターク・シン王は、「敵に近すぎる」という理由でハーティエンを放棄したが、鄭天賜がハーティエンに戻ることはなかった。1773年に中部ベトナムで西山の乱がおけると、阮氏と対立する鄭氏が派兵してフエHueを陥落させ、阮氏一族はサイゴンに亡命した。1777年に西山軍がサイゴンを攻略すると、阮氏一族は鄭天賜を頼ってカマウCa Mauに亡命したが、西山軍に敗れて滅亡した。このとき鄭天賜は降伏を拒否してフー・コックPhu Quocに逃れた。そこにターク・シン王が船を派遣して招いたので、鄭天賜はトンブリーに逃れた。その後1780年に、ターク・シン王に対する反逆の陰謀に加担した疑いを受けて、鄭天賜とその一族が逮捕され、天賜は自殺し、幼児を除く一族53人が処刑された。この事件を生き延びた鄭天賜の子孫のなかには、後に阮朝を興す阮福暎(嘉隆帝)に従って、シャムから帰国した者があった。嘉隆帝はその1人の子を河僊留守に任じた。この後ハーティエンの地方官職は鄭氏に継承されたが、最終的に1833年の反乱に加担して、鄭氏は消滅した[北川2001:191-196,199-200; SAKURAI 1999: 207,209]。なおバンティエイ・ミエスという地名は、ハーティエンの北方内陸、カンボジアのコムポートKampot地方の1郡として現在まで残っている。

⁵ バサックBasak河、メコン河の西側の支流。

⁶ カンボジア最大の商都であるブノム・ベンPhnom Penh(ブノンベン)のこと、あるいはブノム・ベンとその北方にあるロンヴェークLongveaek=ウドンOdongk王都を区別しないでカンボジア市と記していると思われる。

スミーズ版の脚注では、17世紀にはウドンUdongが首都であり、18世紀初にロンヴェークLovekに移ったとするが、典拠は示されていない[Smithies 1997:188]。一般的なカンボジア通史では、カンボジアの『王朝年代記』に基づいて、16世紀の王都をロンヴェーク、17世紀の王都をウドンとする。ただしベトナムの『大南寔録前編』や17世紀のオランダ史料などでは、17世紀以降の王都の名称もロンヴェークと記している。ウドンという呼称は、『大南寔録正編』やヨーロッパ史料では、19世紀のアン・ドゥオンAng Duong王の王都を指して用いられている。

⁷ 1リーグleagueは約3マイル、1マイルは1,609.3m、×3で4,827.9m、さらに×100で482,790m、ゆえに約483km。

た。この年、シャム*Siam*艦隊がそこを破壊した⁸。

シャム軍と艦隊がカンボジアを脅かした時、王は、自分にはシャム人たちに抵抗する能力がないことを自覚しており、国境地帯に住んでいた住民たちに、カンボジア市に向かって移動するよう、そして彼らが一緒に持って行けない物は破壊するよう命令した。こうして50リーグにわたる領土が完全に無人の土地となった。それから彼は、コーチシナ*Cochin-china*の王⁹に支援と保護を求めた。カンボジアがコーチシナの朝貢国となるという条件で、それらが彼に与えられることとなった。彼はこのことを承諾し、陸からは15,000人の援軍、海からは十分な人員と装備を具えた快速ガレー船3,000隻を得た。

陸路から来たシャム軍は、カンボジア人とコーチシナ人を合わせた数の2倍以上で、艦隊は4倍以上だった。陸軍がカンボジアの国境の内側に侵入すると、目の前には無人の地方が広がっているばかりであり、やがて食糧不足に苦しめられることとなった。体力を失った駄獣や象や馬を殺さざるを得なくなり、兵士たちはその肉を食べるしかなかったが、彼らにとっては食べなれていない物であったので、全軍が流行性の下痢や発熱に襲われることとなった。こうして2か月間に軍の半数を喪失し、彼らは自分たちの国へ撤退せざるを得なくなった。その後をカンボジア軍がぴったりと追撃していった。

彼らの海軍もまた不首尾に終わった。彼らは街を略奪し、燃やすために、小さなガレー艦隊でボンテアマスに送り込まれてきた。彼らはこの任務を効果的に成し遂げ、象の歯だけでも200トン以上を燃やした。町から4マイル離れた停泊地に、荷船とジャンク船*Jonks*があった。コーチシナ人はこの機会に乗じて大型の船舶を攻撃し、いくつかを焼き、それ以外を岸へ押しやった。一方シャムのガレー船団は狭い川のなかにいて、潮位が高くなるまでは外に出られず、救援に来ることができなかった。当初の目的を成し遂げたコーチシナ人は、数的に優位な敵と交戦しようとはせず、撤退した。そしてシャム人は艦隊が飢餓に襲われることを恐れ、不名誉ながら、シャムに向かって撤退した。1720年に、私はいくつかの破壊の痕跡と、ボンテアマスの町の廃墟を見た。

カンボジア市は大きな川の岸に位置し、ボンテアマスから陸路、または南西モンスーンのときは水路で、約50～60リーグの距離にある。この国は21カラット*Caracts*の純度の金、1ピクル*Pecul*¹⁰あたり120ドルの生糸、最も大きなもので50～55ドルの象歯を産する。小さな象歯はそれぞれ異なった価格である。同じく多くの蘇芳、白檀、沈香、スティックラック、多くの種類の生薬があり、漆工芸に使うラックがある。彼らはイギリス人と貿易をしたいと強く望んでいる。しかし彼らはオランダ人が彼らの国に商館を設

⁸ シャム水軍のバンティエイ・ミエス＝ハーティエン侵攻は、史料によって年代が異なる。カンボジアの『王朝年代記』では1717年（ガルニエGarnier訳）、1722年（ムーラMoura訳）、1719年（VJ本）。ベトナムの『大南寔録』正編・列伝、『嘉定城通志』では1715年。シャムのアユタヤ年代記では1710年。日本の『華夷変態』では1716年と1717年に、シャム軍が海陸からカンボジアに出兵したことが記されている〔北川2001:208〕。

⁹ ベトナム中部、フエに拠点を置く阮氏政権のこと。

¹⁰ 60kg、1担。

置することを許さないであろう¹¹。

食用の肉と魚は、豊富で安価である。それらは王の許可なしで購入することができる唯一の品物である。私は重さ4～500の若い牡牛を1スペインドル*Spanish Dollar*で購入した。そして米を1ピクル、つまり約140ポンドあたり8ペンスで購入した。しかし家禽は少ない。なぜならこの国はほとんどが森林地帯であるため、鶏は大きくなると森に行き、姿を消してしまうからである。虎や野生の象は森に多数おり、また野生の牛や水牛、大量の鹿もいる。これら動物は全て、捕らえるのも殺すのも自由である。

約200人のトーパス*Topasses*¹²、すなわち現地生まれのポルトガル人*Indian Portugeuze*がカンボジアに定住し、結婚している。そしてそのうちの何人かは政府のかなりの要職に就いており、この国のやり方に倣ってよい暮らしをしている。しかし彼らには聖職者はおらず、また危険を冒して彼らのなかに入り込もうとする者もいなかった。それというのも1710年に、1人の哀れなカプチンCapuchin会修道士が、職務を果たすためにそこに赴き、そして彼の宗派の最高位にある1人が妻を2人持っていることを知り、自身の聖職者としての権限によって、彼女らのうちの1人を遠ざけるよう彼に命じた。しかし彼の教区民はそれに従わなかった。そこで聖職者は彼に対して破門という武器を使用した。このことに相手は大いに憤慨し、彼の精神の導き手たる秀才を、その場にそぐわない厳格さゆえにたたき出した。その後彼らはシャムと中国*China*のマカオ*Macao*に手紙を書き、さらに何人かの神父を求めた。しかし、たとえ殉教者として死ぬ名誉を得られるかもしれないとしても、誰一人として行く者はなかった。

彼ら全員が王からささやかな年金をもらっていたが、生活を維持するにはあまりにも少なすぎた。そのため彼らは火器を持って森に行き、象牙を求めて野生の象を殺し、それを外国人に売った。彼らが象を殺す方法は非常に珍しいものであった。彼らは蛭のよ

¹¹ スミーズ版の脚注では、オランダは1623年にウドン近郊のコムボン・ルオンKampong Luongに商館を設置したが、ムスリム商人が王の監督に不満を訴え、全オランダ人が殺害され、船が焼かれ、その後1652年に和平が成立したと書かれているが、やはり典拠は示されていない [Smithies 1997:189-190]。正しくは以下の通り。

オランダは1636年にウドン近郊のポニエ・ルー Ponhea Lueuに商館を開設した。ポニエ・ルーには「日本町」があり、オランダ商館はその南に置かれた。1641年12月にカンボジアに來航し、そこから日本に向かおうとしていたオランダ船が、中国人商人のジャンク船をメコン河口で襲って商品を奪った。このジャンク船には、マカオのポルトガル人商人の商品である中国絹が積み込まれていた。カンボジア在住のポルトガル人たちはカンボジア王に働きかけ、オランダ商館長を逮捕してマカオで裁判を受けさせるか、あるいは商品を補償させるよう求めた。1642年2月には、ポルトガル人と口論になったオランダ人水夫2人が殺害された。オランダ商館長は王に犯人の処罰を求めた。王はこれを拒絶し、ポルトガル人に金銭で償わせるよう提案したが、オランダ商館長はこれを拒否した。1643年11月27日に、王宮に向かったオランダ商館長以下使節団が殺害され、商館が略奪された。同時期に、ブノム・ベンに停泊中のオランダ船が、宗右衛門以下11人の日本人に乗っ取られた。この事件の報復のためにバタヴィアから派遣されたオランダ艦隊5隻も、1644年6月12日のブノム・ベン前面の戦いに敗れた。その後オランダ商館は1656年に一時再開したが、1658年の内乱で焼き打ちを受けて再度中断した。オランダ商館は1664年に再開するが、1667年7月に「台湾鄭氏の余党」の攻撃によって商館員を殺害され、略奪・放火を受けたことにより壊滅し、以来復活することはなかった [岩生1995:95;北川2014:50,53-54,62,65,73]。

¹² スミーズ版の脚注によると、トーパスTopassはヒンディー語の*dobashi*に由来するマラヤーラム Malayalam 語の単語で、2か国語を使う人間、ゆえに通訳を意味する。また *Shorter Oxford Dictionary* を参照して、「皮膚の色が濃い混血のポルトガル人の子孫、しばしばこの階級に属する兵士、船の掃除人、浴場の接客係に対して用いられる」としている [Smithies 1997:190]。

うな形に鉄片を形成し、その先端を鋭くする。森のなかには、強い毒のある、厚みのある樹皮の木が何本か育っている。彼らはそのナメクジの鋭い方の先端を樹皮に突き刺し、さらにしばらくそのままにして置き、それから火薬を装填した銃にそのナメクジを込め、動物に近づき、その体内に撃ち込む。このようにして傷つけられた象は、人間のもとから逃げ出すが、しばらく見守っているうちに、倒れて死んでしまう。

また、彼らは同じ毒を塗ったナメクジで、牛や水牛を、その舌を得るために殺す。この潜行性の毒は、もう一つの奇妙な特性を持つ。腹が減るか喉が渇くかしたとき、（彼らは森のなかでしばしばそうするのだが）木の葉の上にその数滴を絞り出し、その葉を舐めると、即座に爽快感が得られる。ただし肌に傷がある場合には、その部分に汁が触れると致命的であり、治療薬はない。

私がボンテアマスに到着した時、1人の役人が船に乗ってきた。彼はポルトガル語を少しだけ話すことができた。彼は軽食の贈り物を携えてきて、私に、王に手紙を送って私の到着を報告し、私が王の許可を得て臣下たちと交易するつもりであることを知らせよう助言した。このことを私は実行した。そして12日後に、そうしてよい、ただし私の商品の見本を携えた部下を何人か派遣し、王と王の商人がそれらを見ることができるようにして欲しい、という返答を受け取った。そして2人のポルトガル人が通訳として派遣されてきた。1人は私とともに私の船に滞在し、もう1人は私が見本を持たせて王のもとに送るよう指名した人物に同行するのである。彼らが到着すると、私は第2船荷監督人second Supercargoに銃fusee¹³と銃剣で十分に武装した25人の従者をつけ、小さな見本の包み2個と王への贈り物を持たせて送り出した。さらに、もし機会が与えられなければ、1週間に1度、急使を立てて私に報告するようにという指示を与えた。

都市に到着した後、彼と彼の従者たちの宿泊のために大きな家が与えられ、大量の食料が贈られ、大勢の高貴な人々が彼のもとを訪ねた。しかし彼が王に会えるまでに10日間が過ぎた。終に、王は大変に物々しく、説教壇のような玉座の上に座って、目を伏せて、彼を迎えた。そして極めて仁愛深く話をした。そのうちいくつかは私の目的と関係があったが、大半はそうでもなかった。その後、王は私に交易の自由を与え、激励した。

私は第2積荷監督人からの連絡を期待して3週間以上待っていたが、彼からの報告は全くなかった。私は不安になり、1人の急使を手配して彼のもとへ手紙を運ばせ、可及的速やかに返信するよう命じた。しかし彼が都市で足止めされていることが分かって落胆した。私の部下がどうなっているのかに関する助言が得られなかったため、私は極めて不安であった。さらに南西モンスーンが近づいており、そうなる海岸が風下側になってしまうため、5～6か月間、港の1つに籠っていなければならなくなってしまう。しかも私がいるのが味方の国なのか、敵の国なのか、はっきりしていない。私はこの迷路の中に1週間いた。そしてついに、期日を決めて出発し、生存し、かつ自由だったら、

¹³ スミシーズ版の脚注によると、軽量のマスケット銃あるいは燧石銃 [Smithies 1997:192]。

私を追ってマラッカ *Malacca* に来るようと、部下を残していくことを決心した。私が彼らと一緒に送った商品は、マラッカまで彼らを運んで行くための船を雇うのに十分であろう。私は私の決意を通訳に話し、私の部下がカンボジアで礼儀正しく扱われるように、彼と王の臣下をさらに何人か人質として連れて行かざるを得なくなったと言った。彼は私の決意に驚いたように見えた。そして1人を手配して全速で都市に向かわせ、私の焦りと決意を報告させた。彼は14日で戻ってきた。それは私が出発すると決めていた期限が切れる2日前であった。彼とともに来た3人のポルトガル人が、私の第2船荷監督人からの手紙を運んできた。それによると彼は王に別れを告げ、全速で私のところに向かっていた。そしてポルトガル人たちが到着した3日後に、彼と従者全員が到着した。彼はポルトガル語で書かれた私宛の挨拶の手紙と、イギリス人を誘致して、この国に定住し、交易を保護するための商館や砦を領土のどこにでも建設するようにと書かれた、ボンベイ *Bombay* 総督宛の手紙を持ってきた。

王が私たちをかなり長く不安な状態のままとどめておいた理由は、王の守護者であるコーチシナ王¹⁴の理解と許可なしには、私たちとの交渉に入らないことになっていたからであった。王は最終的に、カンボジアと彼自身の領土の中で我々が商売することを許可した。しかしシャム人たち *Siamers* が彼らの国を破壊したので、このとき彼らは私の積荷と交換する品物が何も準備できていなかった。それらは1～2年で準備できるであろう。

国王が誰かに名誉を与え、恩恵を授けるときは、必ず相当な贈り物をする。王はその人物に2本の剣を贈り、公衆の面前に出ていくときには常に携えているようにする。1本は国政の剣で、もう1本は司法の剣である。彼がこれらの剣を携えているときは、彼と相対する人々は皆、彼にしかるべき場所を与え、所定の形式の言葉で彼に敬意を表さなければならない。しかし彼が他の寵臣と行きあった場合には、互いの特許状の日付を比較して、優先権が生じた方に対し、最初に敬意が表されなければならない。官人たち *Mandareens* が地方に行くときはいつも、民事と刑事両方の法廷を開催する。彼らには罰金を科す権限があるが、その罰金は王の宝庫に納められる。しかし死刑に値する罪では、彼の判決が法律となり、判決後すぐに刑が執行される。

カンボジア人たち *Cambodians* は薄い茶色の肌で、非常に体格がよく、髪は長く、顎鬚は薄い。カンボジア人の女性は容姿が整っているが、あまり淑やかではない。男性は我々のナイトガウンのような衣服を着ているが、頭には何もかぶらず、足には何も穿かない。女性は足首の下までとどくベチコートを着け、体や腕にぴったり合うように作られたフロックを身に着けている。男女ともに髪を整えている。

私は彼らの聖職者には1人も出会わなかったが、通訳から、彼らはシャムで崇拜され

¹⁴ スミーズ版の脚注では、黎朝の裕宗 *Le Du-Ton* (和皇帝 *Hoa Houang-De*)、在位1705～29年としているが、ここはベトナム中部の阮氏政権と理解するべきであろう [Smithies 1997:193]。

ているのと同じ神々を崇拝していることを教えられた。彼らはテプダー *Tipedah* という名の大神と、彼の息子であるプレア・ブローム〔ブラフマ〕 *Praw Prumb* とプレア・プット〔仏陀〕 *Praw Pout* を崇拝している。教会は供物によって維持され、彼らの聖職者はあまり尊敬されておらず、一般的に、下位の身分の信徒の中から選ばれている。

ラオス *Laos* 王国はシャム、カンボジア、コーチシナそしてトンキン *Tonquin* に接している。そこは金、生糸、象牙の産地がきわめて豊富である。彼らは野生の猪や牛が彼らの果物やトウモロコシを害するのを防ぐために、畑や庭を杭で囲んでいる。彼らは信仰において全員が異教徒 *Pagans* である。ラオスの住民 *Natives* は周囲の隣人たちよりも肌の色が白い。私はシャムで彼らを男女ともに何人か見た。ラオスの女性たちは、ポルトガル人やスペイン人の女性たちと比べて、ほとんど見劣りしない。

カンボジアの海岸沖には、いくつかの島がある。しかしどれ一つとして人は住んでいない。なぜならサリター *Saleeters*¹⁵、すなわち海賊がその海岸にはびこり、彼らが労働によって得たものを奪うからである。しかしながら、ポンテアマス¹⁶の西約3リーグのところに1つの島があり、クアドロール〔コック・トル〕 *Quadrol*¹⁶ と呼ばれ、居住によく適している。長さは約3リーグ、幅は1リーグである。木材や新鮮な水が豊富で、地面は適度な高さがあり、土壌は黒く肥沃である。例外はポンテアマスに面している東側で、そこはいくつかのよい砂浜がある。雨が降り、風が吹く季節には、それらは良い安全な港となる。

ポンテアマスから約30リーグの東南東にカンボジア川の西の入り口があり、一般的にボッカ・ド・カラングエラ *Bocca de Carangera*〔蟹の口〕と呼ばれている。そこに進入する水路のなかで、最も浅い場所は4尋¹⁷で、その内側は場所によっては20尋まで深くなる。北の入り口はより広いが、はるかに浅く、西の水路から約10リーグ離れたところに位置していて、ほとんど出入りはない。ポンテアマスとその川の間には、いくつかの小さな無人島がある。プーロ・パンジャン *Pullo-panjang* がその最大で、8つの島の群からなり、良い港を形成している。プーロ・ウビ *Pullo-ubi*¹⁸ は最も東にあり、良い帆柱を産する。

4つから5つの島で構成されている群島のなかで、プーロ・コンドール *Pullo-condore*¹⁹ が最大かつ最高である。それはカンボジア川の西水路から南に約15リーグのところにある。プーロ・コンドールはかつて、1702年に、アラン・ケッチポール *Allan Ketchpole*

¹⁵ クロファード *Crawfurd* はオラン・ラウト *Orāng-laut* すなわち「海の人」に関して以下のように記している：彼らはジョホール *Johore* 王の臣下であり、オラン・サラット *Orāng Sallat*、すなわち「海峡の人」と呼ばれてきた人々と同じである。……この土地に関してヨーロッパ人が最初に知識を得た当時から、彼らはこの呼び名をもって、海賊として有名であった〔*Crawfurd* 1828:43〕。

¹⁶ フーコック島。

¹⁷ 1尋は183センチ。

¹⁸ ホン・コアイ *Hon Khoai* 島。

¹⁹ コンソン *Con Son* 島。

氏²⁰によってイギリスの入植地が置かれるという、栄光を得たことがあった。その年、中国の沿岸にあった舟山*Chusan*商館が消滅した。当時彼は、これらの地域における、イギリス東インド会社の事務局長を務めていた。

彼は入植地の場所選びを誤った。その島が産するのは木と水だけ、そして魚を獲ることができるだけだった。彼は兵士にするため、そして要塞を作る助力とするために、何人かのマカッサル人*Maccassers*を確保した。そして彼らと、もし彼らが離職したいと思ったならば、3年の終わりに彼らを解任するという、固い契約を結んだ。しかし彼は契約を実行しなかった。このことが彼自身の破滅と、その入植地の喪失の原因となった。なぜなら東の無法者たちは、彼らとの間になされた契約と誓約が正当に守られている限りは忠実であったが、同盟が破られた際には、決して仇を忘れず、残酷であるからである。ケッチボール氏は合意した期間を超えてマカッサル人を引きとどめておきながら、まだ彼らに彼自身と要塞の警護を任せていた。そして彼らは夜に機会をうかがい、城砦に宿泊しているイギリス人が寝静まったときに、全員を虐殺した。目覚めた人々が騒ぎ、砦の外に宿泊していた少数の人々がそれを聞いて危険を感じ、海岸に走った。そこでは親切な神の意志が、櫂や帆が備え付けられているボートに彼らを導いた。彼らはそれに乗り込み、海岸から離れ、海岸にいる血まみれの悪党どもが彼らを見つけるまでに、石を投げて届かないほどのところに逃れた。こうしてボートに乗った人々は、100リーグ以上航海し、疲れ果て、空腹かつ渴ききった状態で、ジョホール*Johore*王の領土内のある場所にたどり着き、親切に世話をされた。脱出できた者の1人は聖職者で天才的なパウンド*Pound*医師²¹であり、もう1人はソロモン・ロイド*Solomon Lloyd*氏²²（私の古い知人）であった。

プーロ・コンドールには2つの港すなわち投錨地があった。しかしどちらもよい場所ではない。1つは北東の端にあり、南西モンスーンで使用するのを余儀なくされる。もう1つは西側にあり、北東モンスーンのときに使われた。その底は岩だらけで、そのために錨や綱を失う危険性がある。しかし1つの商館をその海岸に設置する必要があると考えられたときに、そこが彼らの砦を作るための場所として選ばれた。私は以前述べたクアドロールではなく、なぜそれらの島を選んだのか不思議に思う。

カンボジア市は砂州から100リーグ上流にあると推測され、川は低い島と砂堆で埋められていた。ラオスの国はその場所からさらに約40リーグ上流である。しかしカンボジアの都市より上流の航行は、小さな漕ぎ船で行われている。その川は世界で最も長いものの1つであるので、それらの漕ぎ船が多く使用されている。

²⁰ スミシーズ版の脚注によると、彼は1699年に中国に向かい、1703年にプーロ・コンドールに移動し、1705年に殺害された [Smithies 1997:196]。

²¹ スミシーズ版の脚注によると、ジェームズJames・パウンド師はケッチボールとともに1699年に中国に向かったが、プーロ・コンドールでの虐殺時にはカンボジアにおり、1706年にイギリスに戻った [Smithies 1997:197]。

²² スミシーズ版の脚注によると、彼は中国語ができ、ケッチボールとともに中国に向かった。また彼は虐殺を免れなかったとされている [Smithies 1997:197]。

2. コーチシナ [Hamilton:208-215]

第49章 コーチシナとトンキン：彼らの宗教、法律および慣習について

コーチシナは、川によってカンボジアから隔てられているに過ぎない。その川は、場所によっては幅3リーグになる。それはカンボジアよりもはるかに大きく、より豊かな国であり、住民たちは、カンボジア人よりも、労働や戦争の労苦に耐える度胸や強さがあるが、異邦人に対しては、それほど話しやすくも好意的でもない。コーチシナ人は、カンボジアでの商売によって徴収された関税と税金の半分の徴収する一方、異邦人が彼らと取引することはほとんど奨励していない。彼らの国は金、生糸、薬種が豊富で、毎年中国の広東に送る分を除いて、それらをカンボジアに運び、そこで売り払う。そして私はジョホールやバタヴィアBataviaで、彼らのジャンク船の何隻かが貿易しているのを見たことがある。

彼らの宗教は中国のやり方にならった異教で、中国人がするのと同じやり方で、同じ神々を崇拝している。彼らの法律は反逆罪に対して過酷で、血なまぐさいものである。罪を犯した人が苦痛をとまなう死刑に処されるだけでなく、血族内の縁者も同じく死刑に処される。彼らの都市や町は区画に分けられ、それぞれの通りの端は横木の門で仕切られ、その門は各区を区切るよう配置されている。これらの門は毎晩閉じられ、鍵をかけられるので、夜になると連絡が取れなくなる。しかし、もし区画の一つで火災が発生したら、女性たちと子供を除いたその区画のすべての住民が隔絶される。

コーチシナではキリシタンはほとんど黙認されていないが、それでも彼らの間で大きな尊敬を集めている1人のフランスの聖職者がいた（そしておそらくいる）。しかし彼らの国で存在が露見することは、ほかのどの聖職者にとっても生命にかかわることだった。このフランス人は、シャムの司教のシシー Cissie氏と手紙でやり取りをしていた。彼は、そこはクリスチアンの聖職者たちにとって危険であるという話を知りながら、半ば狂った年老いた狂信者を、殉教者として死ぬ名誉を得させるために、そちらへ行かせようとした。そして彼が私との約束（それはただ、シャムで逃亡した私の船員を誰も庇護しないということであった）に誠実であったならば、私はカンボジアへの航海で彼に助力していたただろう。そしてそこから、彼は容易に、その輝かしい王冠を得に行くことができたであろう。

コーチシナは、カンボジアの川からクアンビンQuambinの川まで、約700マイルにわたって延びる広い海岸を持っている。そこには多くの良い港があるので便利だが、異邦人はあまり訪問しない。東海岸に沿っては非常に深く、いくつかの場所で深さを調べたところ、海岸から半リーグ以内で60～80尋のあいだだった。

この海岸にはいくつかの島がある。海岸に近いものは危険ではない。プーロ・セッカ・デ・テラPullo-secca de terra〔陸の浅瀬〕は最南の、海岸に最も近い場所にある。そこは人が住んでおらず、焦げた岩礁の一群のようにしか見えず、その上には木も藪

も草も見られない。私はそこから1マイル以内のところを通り過ぎた。それは海岸から約1マイルのところにある。プーロ・セッカ・デ・マーレPullo-Secca de mare〔海の浅瀬〕およびパラセルParacel〔西沙諸島〕の危険な浅瀬から延びる一続きの島々の全ては、島というよりもむしろ岩とみなしてよいものである。プーロ・カムビールPullo-cambirは海岸から沖合約15リーグ、パラセルの近くに位置する。そこはかなり大きい、無人島である。プーロ・カントンPullo-cantonは海岸近くにあり、チャムペロChampelloの島々もそうであるが、その沖には危険はない。北東モンスーンのときには、南向きに流れる強い潮流があるため、パラセルのあいだに押しやられる恐れがあるので、水先案内人はコーチシナ沿岸近くを維持するよう注意を払わなくてはならない。それは長さ約130リーグ、幅約15リーグの危険な岩の連なりで、両端にのみいくつかの島がある。それらの岩の間にはいくつかの内部潮流があるが、危険に近寄らないようにするための目印は知られていない。なお私はスーラトSuratから来た1隻のイギリス船が、偶然にもそれらのあいだを、不意にコーチシナの海岸が現れるまで、危険に気づくことも見ることもなく航行しきったことを知っている。

1690年に1隻のポルトガル船がパラセルの北端の島の1つで遭難し、海岸まで泳ぎ着いた3、4人以外は全滅した。彼らに続いてたくさんの漂着物の破片が岸に着き、いくつかの小麦粉の容器がたまたま岸に打ち寄せられた。それによって、彼らは生き延びた。彼らは使うことができた木材や板で、1軒の小屋を建てた。そして彼らは岩の洞窟に、いくらかの新鮮な水を見つけた。彼らは1か所に、乾季にそなえて雨水を保存するために、水槽を作った。彼らは海藻を取り、島の海岸で見つけた泥と混ぜ合わせ、その混合物を、雨水を貯めるのに便利な場所に置くという方法によって乾季をしのいだ。彼らの食事は、この島に大量にやって来る海鳥と亀であった。3年間で、1人を残して彼ら全員が亡くなってしまった。1701年にマカオに行く1隻の船が、意図せずに島の近くにやってきて、頭上に手を上げて振っている1人の男性の姿を見た。彼らは同情して1隻のボートを島に送り、その人物が同国人であることを知って驚いた。彼が自分の不運を彼らに語り、どのくらい長くその島に1人でいたかを語ると、より一層驚いた。彼らは彼に服を着せて、食べ物を与え、マカオに連れて行った。そこで私は1703年に彼に会い、彼自身の口からその話を聞いた。

しかし、ここでコーチシナに話を戻すことにする。約3～4世紀前は、それはトンキンTonquinの1地方に過ぎなかった。少なくともそれらは両方とも、1人の王の支配下にあった。彼は跡継ぎを残さずに死に、彼の支配圏の統治を、彼がその資質を非常に高く評価していた、彼の兄弟と姉妹の間で分割した。彼は兄弟をコーチシナに住まわせて、その統治を担当させた。一方姉妹にはトンキンの統治を担当させた。ただし年に1度会議を開き、国の利益のために問題を協議するように命じた。

その婦人は若く、結婚適齢期であった。国の調和は、その結婚によってすぐに終わっ

た。夫は野心的になり、統治権をすべて手中に収めたいと願ったが、義理の兄弟には公正にふるまった。そしてある時、女王と、以前のように両方の国を1つに統合する必要性について話をした。そして彼は、彼女は最も古く高貴な王国の所有者であり、両国の権利は彼女に属していると言い、そして両方の王国を彼女の手中に収めるために、共犯を疑われることなく、兄弟を切り捨てる方法を探すと言った。女王は、外見はその計画を受け入れたふりをして、個人的に彼女の兄弟に危険を知らせた。当時彼はトンキンの宮廷にいたので、彼女は彼に、数日間狩りに行くふりをして、自分自身の領土にできる限り急いで戻るよう忠告した。そこならば、彼の生命を脅かす陰謀から安全であろうから。そして彼はこの忠告に従った。コーチシナに安全に戻ると、彼の貴族の会議を召集し、すべての事情を彼らに語った。

コーチシナ人たちは、彼らの王子を傷つける計画を知り、極めて不愉快に思い、そのときからトンキン人たちとのすべての友好と通商を放棄した。クアンビン川を、トンキンの領土の南側、コーチシナの領土の北側の境にし、両者がそれぞれ4万～5万人の兵を挙げ、川を挟んで向かい合ったまま、これまで何事も起こっていない。もしコーチシナ人の誰かが、彼自身の国の司法から逃れてトンキン人たちのもとにやってくることがあったら、彼らは彼を親切に迎え、礼儀正しく扱う。しかし、もしトンキン人が同じ状況に陥り、コーチシナ人たちのもとに避難所を求めていくことがあったら、彼は奴隷身分を宣告され、彼自身の宮廷から許しを得て、彼の身代金を支払うまで、そのままではない。

トンキンは私が針路を向けるべき次の王国であり、そこにはイギリスとオランダの両方の商館があった。しかしイギリスの会社の業務は不調で、彼らの商館は1698年の1月に撤退した。オランダ人はトンキンでの貿易にほとんど利点を見いだせなかったので、約6年後に撤退した。しかしイギリス人の私的な貿易は、1719年までうまくいっていた。この年、ベンガルBengalから来た1隻のイギリス船が、暴力行為によってそれを破壊した。

船は荷を積んで、出帆する準備を整え、トンキンの首都のカチエオCatheoから川を下って行った。このとき船荷監督人は、この国のよく知られている法律を無視して、1人のトンキン人の少女を乗船させ、一緒に連れていこうとした。しかし彼女の友人たちは、彼女がいなくなったので、行政長官に通知した。彼は人を遣って彼女を要求したが、船荷監督人は彼の愛人を渡さなかった。その結果戦闘が生じ、双方の側の何人かが殺された。その船を率いたウォレスWallace船長²³は、殺された1人となる運命であった。しかしながら、イギリス人は勇敢にも彼らの賞品を持ち去っていったが、私はこれ以降、トンキンの貿易については一度も聞いたことがない。

²³ スミシーズ版の脚注によると、サクセス*Success*号の船長、1721年頃死亡 [Smithies 1997:204]。

トンキンは、南はコーチシナ、西はラオス、北は中国の広西Quansi、東は海に囲まれている。その国は、生活の便利と維持に必要なすべてのものにおいて、けた外れに豊かな国である。

それは金と銅を生産しているが、それらのどちらも上質ではない。彼らは生糸を豊富に持っており、その一部を絹製品に加工しているが、どれも上質ではない。彼らのバーズBaaz²⁴は最高で、それらを彼らは一般的に黒く染める。それは柔らかくてよく紡がれているので、非常に長くもつ。また洗えば洗うほど、より黒くなることをそう言ってよいなら、色がより鮮やかになる。彼らは籐Rottan²⁵で鉢、杯、テーブルを作る。そしてそれらを様々な色のラックで非常にきれいに覆い、金メッキを着せる。彼らはいくつかの磁器も持っているが、とても粗末で絵付けが悪い。これらがトンキンからの輸出商品である。

海から150リーグ以上にわたって、中国の地方である広西、貴州Quichewの境界に沿って、越えられない大山脈が続いている。それは中国からの道を進んでくる幾度もの侵略軍から、トンキンを安全に守っている。そしてこれらの山々は厚い森でおおわれており、野生の象、虎、鹿がたくさんいる。しかし飼いならされた象を使用したり誇示したりすることは、トンキンや中国ではあまり意識されていない。

キリスト教は、トンキンで説教することを固く禁じられているが、そこにはローマ教会のキリスト教徒が何人かいる。彼ら自身の宗教は、中国の教義にならった異教である。そして彼らは、昔々トンキンとコーチシナは、両方とも中国の地方であったという伝説を持っている。

トンキン人たちはかつて、ヨーロッパ人の血を自分たちの国のなかに持つことを強く望んでいた。そのために大貴族は、イギリスやオランダの船員たちがトンキンに滞在している間、自分の娘と彼らと結婚させることを、恥や不名誉ではないと考えていた。そして彼らの義理の息子の出発時には、しばしば非常に手厚く贈り物をした。とくに彼らが妻を子供とともに残していった場合には。しかし不貞行為は夫にとって危険である。彼女らは毒殺をするすべに精通しているからだ。

男性と女性はどちらも姿がよく、かなり美しいが、身長は低い。娘たちは、未婚の間は²⁶自分の歯をととても白く保つ。そしてある薬草の汁を3日間続けて口に含み、漆黒に染める。そうすると黒い色はそのまずっと続く。しかしその汁が口の中にある間、彼らはつばを飲み込むことをあえてしない。それが有毒であるためである。

²⁴ スミーズ版の脚注によると、おそらく中国語の*pai-sze*、白絹に由来する [Smithies 1997:204]。

²⁵ スミーズ版ではrattan [Smithies 1997:205]。

²⁶ till they have lost the blue of their plumb. スミーズ版の脚注では、この句に関して*Oxford English Dictionary*がハミルトンを引用して、明らかに彼女らの若々しさの盛りを意味すると書いていることを提示し、この句は彼女らの処女性の喪失を指しているとしている [Smithies 1997:206]。

引用文献リスト

- Crawfurd, John. 1828. *Journal of an Embassy from the Governor-General of India to the Courts of Siam and Cochinchina*. Hebray Colburn. London.
- Hamilton, Alexander. c1739(1995). *A New Account of the East Indies : being the observations and remarks of Capt. Alexander Hamilton, who resided in those parts from the year 1688, to 1723 : trading and travelling by sea and land, to most of the countries and islands of commerce and navigation, between the Cape of Good-Hope, and the island of Japan*. vol.2. Printed for A. Bettesworth and C. Hitch, at the Red-Lion in Pater-noster-row. London. (Asian Educational Service. New Delhi, Madras.)
- 岩生成一. 1995.『南洋日本町の研究』岩波書店.
- 北川香子. 2001.「ハーティエン」『岩波講座東南アジア史第4巻 東南アジア近世国家群の展開』pp.189-209.
- 北川香子. 2015.「ヨーロッパの船が河を遡ってきた頃－17世紀カンボジア史再考－」『南方文化』41. pp.37-75
- Pavie, Auguste. 1884. *Excursion dans le Cambodge et le royaume de Siam*. Imprimerie du Gouvernement. Saigon.
- SAKURAI Yumio & KITAGAWA Takako. 1999. Ha Tien or Banteay Meas in the time of the Fall of Ayutthaya. *From Japan to Arabia: Ayutthaya's Maritime Relations with Asia*. pp.150-220.
- Smithies, Michael. ed. 1997. *Alexander Hamilton. A Scottish Sea Captain in Southeast Asia. 1689-1723*. Silkworm Books. Chiang Mai.

(2021年度外国語演習IIP受講生, 本学教授)

